



# たいしも通信

シリーズ第15回目となる今回は、戦後すぐに発生した長府の大火についてです。当然のことながら、単なる災害の話ではありません。

## ◆長府大火の概要

昭和22年10月17日午後、土居の内(下関市長府支所の周辺付近)の民家から油の引火が元で出火し、次々と燃え広がりました。終戦直後の混乱の最中の出来事であり、当時駐留していたニュージランド軍も消火活動にあたりましたが、消火機材の不足等から被害は甚大なものになりました。実は下関は西日本でも広島に次ぐ戦災都市で、昭和20年6月と7月の大空襲によって焦土と化しました。近傍でありながら、そのような状況から免れた長府が大火に見舞われてしまったのです。

## ◆被害の範囲

被害は焼失戸数約700、破壊17、被災面積約2万8千坪、被災者2千人超、負傷21人、損害額はおよそ1億5千万円という大惨事となりましたが、城下町の面影が何とか焼け残ったのは不幸中の幸でした。現在の地名でいうと、中央の南北に延びる旧山陽道周辺から国道9号線の間が消失しましたが、火勢は、東方向は国道2号、西方面は忌宮神社の高台、南方向は壇具川が防火壁となつて鎮火。特に壇具川は有効だったようですが、他方、この時点で長府に水道設備がなかったことが被害を大きくした要因であったようです。

ところで北方向はというと、寺町となっている長府中之町から長府金屋町に至る商店街に浄土宗法性山本覚寺があり、大火の際、隣家まで迫った猛火に山門の龍が水を吐いて門を守ったとい

う伝承があるそうです。この山門は天馬門と号され、木鼻(寺社建築などで隅柱から突出する頭貫などの装飾的な端部のこと)に馬の彫刻が施された特徴的なものとなっています。近年の改修でも再現されており、競馬の御利益があるかもしれませんね。

昭和22年(1947年)12月には昭和天皇陛下が被災地を激励のため長府に来訪され、復興へと歩む被災者たちの大きな支えとなりました。昭和天皇は、天皇陛下になられてから昭和22年と同33年、同38年の計3回も下関をご訪問されています。

## ◆ニュージランド軍

長府大火前年の昭和21年3月、下関を占領統治していたアメリカ第2海兵師団第6連隊に替わり、中国四国地方を管轄した英連邦占領軍(BGC)に属し山口県を管轄する第2ニュージランド海外遠征軍(Tayforce)が進駐、神戸製鋼所長府工場内に司令部を置きました。また、当時の長府庭園はその司令官の宿舎になっています。イタリヤ戦線を戦った第9歩兵旅団を中心に編成された彼らは、米軍に比べ物資は乏しかったようですが、日本人に対する人種的偏見は少なかったようです。

過去に何度か触れていますが、小月へは大火の翌年、昭和23年(1948年)4月から米軍とともに駐留し、昭和25年(1950年)3月、小月飛行場の接收が解除され、以後は警察予備隊小月訓練所となります。

## ▼編集後記▲▲

小月勤務の頃、休暇で島根の国民休暇村に遊びに行き、その管理者の男性に、どうせ分らないだろうと思いつつも、小月というところから来ました、と告げたところ、自分は小月訓練所の1期生だよ、と言われ、土下座して謝ろうかと思いましたが。

例によって、内容に関する責任は全て支部長にあり、特に規則等に定めてあるもの以外は私の個人的見解が色濃く反映されていますので、ご意見等ございましたら遠慮なくお知らせ下さい。